



謙澄を巡る人々

題字
棚田看山

その3

三笠宮彬子女王の父上は寛仁親王、お祖父さまの三笠宮崇仁親王は昭和天皇の弟君にあたります。三笠宮崇仁殿下は歴史学者として有名で、特にオリエント学の泰斗たいとでもありました。その血筋を引く彬子女王の専門は美術史。英国オックスフォード大学に留学され、大英博物館が所蔵しているウイリアム・アンダーソンが持ち帰った日本絵画の研究で博士号を取得されています。

アンダーソンは明治6年にお雇い教師として来日して以来、日本美術に興味を抱いて美術品収集に力を注ぎ、およそ三千点の絵画を持ち帰って、大英博物館に売却しました。その際、体系的に日本の絵画を研究し、世界で最初の日本美術史『Pictorial Arts of Japan』を英国で出版しました。

当時ケンブリッジ大学に留学中の末松謙澄はアンダーソンに日本美術についての様々な助言をただけでなく、帰国後にこの本を翻訳し邦題『日本美術全書』全二巻として出版しました。この本は日本における最初の本格的美術史で、帝国博物館初代館長の九鬼隆一が序文を、文部官

あきこ 三笠宮彬子女王

見発の再・謙澄の美術史家

僚の黒川真頼まよりが校正や時代考証をするなど日本美術行政の中枢部が参加しています。
彬子女王は、この『日本美術全書』は政府主導による「西洋的分類法に当てはめた日本美術の新しい姿」を国民に提案しようとしたのではないかと、との仮説を提示されています。この仮説の中軸となるのが末松謙澄の業績です。

謙澄は序文でこの本の翻訳・出版の為に大変な労力と費用を使ったが、この本が日本国民に有益であると信じるがゆえに百事をなげうって完成させたと記しています。この末松謙澄の日本美術に対する強い思いが彬子女王の博士論文に繋がるわけです。

行橋市では国際シンポジウムを開催し、彬子女王に謙澄の業績について基調講演をしていただくことになっていましたが、コロナ禍によって計画の中断を余儀なくされてしまいました。コロナ禍が終息した段階で、国際シンポジウムが開催され、彬子女王にも行橋にお出いだくださることを待ち望んでいます。

(文化人末松謙澄を考える会 植田義浩)